「台湾海峡は大丈夫」か？ (4)

練馬区　板橋光紀

－１０月号（３）からの続きです－

【其の三】共産軍による、国府軍に占拠された島々への攻略は1950年４月に開始された。先ず広東省南端に近い海南島を奪回する。海南島は日本の九州と同じ位の面積があり、当時小火器程度しか持たない国府軍の敗残兵が何千人かで守備した所で、とても共産軍の上陸を防げるサイズではなかったものと見える。翌５月には福建省に属する東山島と浙江省の舟山群島の国府軍が掃討される。このあたりまでアメリカはマッカーサーに率いられた進駐軍が至近距離の沖縄に居ながら、台湾での外省人の横暴振りや非民主的な政治のシステム、共産軍の島々への攻略や国府軍の敗退振りを観察しつつも、徹底して「傍観」の姿勢をとり続けている。

ところがその翌月1950年６月に朝鮮戦争が勃発、アメリカは韓国の支援にまわり、中国は北朝鮮を支援する為国府軍の掃討作業を中断する。朝鮮戦争の末期に中国の正規軍（人民解放軍）が「義勇軍」の名で参戦して以来アメリカの対中国政策が大きく転換、「中国封じ込め」に変わる、朝鮮戦争が終息すると中国は国府軍に占拠されている島々の奪回作業を再開、1955年１月に浙江省の江山島と大陳列島を取り戻し、残るは福建省の金門島と馬祖島の２ケ所だけとなる。解放軍による両島への砲撃は１９５８年８月に開始される。国府軍の心理的な動揺を目論んだものか、砲撃は奇数日だけに行われ、合計５万発の砲弾が打ち込まれたと云う。そこへアメリカの第７艦隊が介入して来て、双方の発砲は止む。

それ以来今日までの４０年間の長きに亘って膠着状態が続き、今だに終戦はおろか、休戦の合意にも達していない。そしてアメリカは非民主的な政治を継続している台湾への肩入れを積極的に行い「中国封じ込め」の一翼を担わせて来ている。当時の世界情勢を見るに、アメリカによる「台湾支援」と「中国封じ込め」はほとんどの西側諸国から支持されていたと考えられる。しかしそれは米ソ冷戦時代、ドミノ現象、共産中国に対する警戒感が背景にあった時代の話である。1972年のニクソン訪中に始まり、1979年には中国の脱共産主義宣言、自由主義経済社会への仲間入りと、世界中の国々が中国との関係改善の方向へ歩み出して世の中は大きく変化した。

今ではアメリカと中国の間柄はまるで新婚カップルのごとき蜜月時代になっていると云うのに、こと「軍事」についてのみが「中国封じ込め」の時代と変わりがないような「日米防衛協力のガイドラインの設定に台湾海峡を視野に入れる」日米の会話はいかがなものであらう。私は日米の為政者は共に「軍部の突出」を完全にコントロール出来てないのではないかと疑っている。

私が前記福建省出張を終えて帰国後数日してから誠に呆れはてた新聞の報道を見た。それは台湾海峡に於ける解放軍の演習の始まる１ケ月前に当たる。「日本の自衛官とアメリカのＣＩＡ職員の二人が」私が金門島をながめながら物思いにふけっつていた「アモイの黄厝海岸で中国の官憲に拘束された」と※いう内容である。私は日本の総理大臣又は防衛庁長官が現役の自衛官に「金門島付近と中国の演習の準備状況を偵察して来い」等々といった命令を出したとは思えない。我々国民は為政者や防衛官僚に対して「外国から誤解を受けるような偵察」や「ひょんなキッカケから紛争に発展する可能性のあるような行動」まで含めた権限を負託した覚えはない。ＣＩＡの職員と行動を共にしていたのが更に悪い。これでは誰が想像したって「日本の軍部は外国の紛争ポテンシャル地域を見て廻っている」と思うだろうし、「日本の軍部はアメリカの軍部と勝手に相談して、両国民の知らぬ間に、知らない場所で紛争の種をまき散らしている」と思われたって仕方がない。

私はこの報道を見てすぐに満州事変の引き金になった「中村大尉事件」を思い出した。この事件は昭和６年、参謀本部が満州、興安嶺地方の兵要地誌調査のために中村震太郎大尉と井杉延太郎曹長を派遣、中国兵に捕えられて射殺されたものだ。陸軍はこの事件を満蒙侵略の口実とする為に事件を公表、中村が軍事探偵であることを隠して中国側の不法行為だとの宣伝を行った。この後「義勇奉公中村大尉」という軍歌まで作られて中村は英雄として祭られている。

アモイは直径５キロメートル程の丸型の島でアモイ湾に浮かんでいる。大陸との距離は２キロメートル程しか離れておらず、ちょうど相模湾に浮かぶ江ノ島に似て、大陸とは長い橋で繋がっている。私は黄厝海岸へ来るまで金門島という一つの島が台湾に※支配されているものだとばかり思い込んでいたが事実は大違いだった。普通金門島と云うのは大金門と呼ぶ本島のことで、アモイ島の東１５キロメートルのところにある。高い山もあり、伊豆の大島程の大きさで人口は10万人だと云う。その手前に小金門と呼ぶ小さな島を含め大陸に向かって点々と６つの小島があり、いずれも海抜数メートルの草っ原にしか見えないから多分水も無い、これらの小島は元々無人島であったと思われる。驚いたことに国府に占拠されているのは大金門だけでなく、これら６つの小島すべてであると云う。まるで相模湾の入口に点在する伊豆七島のすべてが、小笠原の父島母島を本拠とする反乱軍に乗っ取られたような感じになっている。

しかも大陸に一番近い国府方の小島はほんの３キロメートル程の至近にあり、泳ぎの達者な人ならば泳いで渡れる、まるで熱海の海岸から初島を見ているような距離だ。島の大陸側に面して畳みを５～６枚合わせた位の大きな看板が８枚並んでおり、その「中国を統一しよう」といった意味のプロパガンダは大陸の人々の肉眼でも読みとれる。これでは中国としては主権を侵されているようなもので、面目丸つぶれだらう。国府側の７つの島々は多分連携し合っている筈だから中国軍もうっかり手は出せまい。

金門諸島が国府側にしてみれば中国軍のアモイに於ける行動を牽制する役割を担っていることは解った。馬祖島は中国軍の福州近辺での行動を監視しているであろうことも想像出来る。

しかし中国は広いのだ。中国海軍の拠点は天津、旅順、威海衛、海南等他にも沢山あり、国府軍が金門と馬祖でいくら頑張っていたとて相手がアモイと福建以外の拠点から出撃して来た場合は全く役に立たず、「二つの目玉」足り得ない。国府軍で少し国際情勢と最近の兵器の性能に関する知識とを備えている人ならば、金門と馬祖を占拠していることの無駄さと、世間をさわがせ、アメリカの軍部と日本の自衛隊に飯の種を与えてエキサイトさせていることの愚を悟るに違いない。　（続く）